

上勝町棚田地域での棚田アイスを活用した地域活性化の取組み

かみかつ棚田未来づくり協議会 正会員 ○大山沙代美 かみかつ棚田未来づくり協議会 非会員 上杉早弥香
(株) BEATICE 非会員 山口冨希 徳島大学人と地域共創センター 正会員 澤田俊明
四国大学地域教育・連携センター 非会員 峪口有香子 山口大学経済学部 非会員 宮井浩志

1. はじめに

かみかつ棚田未来づくり協議会（以下「協議会」と略記）は、過疎高齢化がすすむ上勝町の八重地・市宇・田野々・檜原の4つの棚田集落を主な活動フィールドとして、交流活動促進による棚田集落の持続や集落居住をめざした取組みを展開している。協議会の構成は、棚田集落での活動組織、月ヶ谷温泉、上勝町、大学研究者、支援団体の約20組織・個人で構成される。協議会は、過年度において、LEDを用い大規模棚田ライトアップ、「食」でつなぐ「星の駅」ネットワーク、森林復元スギの家プロジェクト、ボランティア手帳による若者ボランティア連携、過疎地での地元人材を対象とした自然体験指導者育成などの取組みを継続して実施している。

しかしながら、コロナの影響による直接交流活動がほぼストップしたこと、10年、20年と続くエンドレスともいえる棚田維持活動・活性化活動への疲れもあり、2020年夏に抜本的な活動の見直しと再構築を行った。その結果、コロナ禍のもと現有資源を活かした「かみかつ棚田ウェブ談義所」「棚田アイス」「棚田50の冒険」など明快な中間目標を持つ新たな取組みがスタートした。ここでは、棚田アイスの取組みについて示す。

2. 棚田アイスの概要

神奈川県葉山町に移住した若者夫婦が、棚田への恩返しを込めて少ない生産量の棚田米を多くの関係者に届けたいとの思いから棚田アイスを開発するとともに製造販売組織（BEATICE）を設立し、クラウド・ファンディングも併用して棚田アイスの取組みをスタートした。棚田アイスは、各地の棚田米を原料として植物性のみの原料によるヴィーガンアイスで、これまで葉山（2018年4月・神奈川）、嶺北（2019年7月高知）、姥捨（2019年9月・長野）、上山（2020年4月岡山）、三都（2020年6月熊本）の棚田地域でアイスが誕生しており、上勝（2020年09月徳島）は全国6番目となる。棚田アイスの販売価格は、1個350円（税抜き）である。

3. 上勝での棚田アイスの取組み

（1）上勝町での棚田アイスの取組みの経過

協議会では、2019年10月の全国棚田サミットや2020年2月の徳島大学タウンミーティングで構築した人脈から、2020年7月に棚田アイスの取組みの情報を得、8月上旬に協議会総会で棚田アイス取組みの決定を行った。9月中旬に棚田アイスとして商品名「上勝アイス」が誕生し、10月より棚田アイスの販売がスタートした。

協議会で棚田アイスを導入するきっかけとして、①棚田アイスを作りたい棚田地域から白米20キロを提供するだけで約2400個の棚田アイスができること、②アイス商品の買取りは棚田地域の負担がないこと、③棚田アイスが1個売れると棚田地域側に10円の寄付が還元されること、④提供する棚田米を農協買取価格より高値で買い取ってくれること、⑤棚田米商品が誕生すること、という製造者の基本の仕組みによるところが大きい。

つまり棚田地域側として、スタート時の棚田アイスの取組みにおいて、設備投資、資金投資、人材投入のハードルが著しく低いことがあげられた。

表1 かみかつ棚田未来づくり協議会での棚田アイス取組みの経緯

・2019年10月13日全国棚田サミット（山口県長門市）・人脈構築①
・2020年02月22日徳島大学タウンミーティング（徳島県上勝町）・人脈構築②
・2020年07月17日徳島ミーティングにて棚田アイスの情報を入手（上記①②より）
・2020年08月05日かみかつ棚田未来づくり協議会にて棚田アイス取組等の決定
・2020年08月11日八重地、市宇、田野々、檜原産白米20キロを製造者に送付
・2020年08月中旬～09月末ウェブ会議（協議会～製造者）、仕組み構築、販路開拓
・2020年09月14日上勝アイス完成
・2020年09月16日上勝アイス地元試食会+オンライン会議
・2020年10月01日上勝アイス販売スタート
・2020年10月03日棚田アイス・ウェブリレー試食会（8都道府県）
・2020年10月～12月上勝町棚田地域地元住民試食会

(2) 寄付のサプライ・チェーンの構築

棚田アイスでは、「製造者寄付」として棚田アイス 1 個が売れば棚田地域側に 10 円の寄付が還元される。2020 年 8 月～9 月上旬の間、協議会は製造者と議論して、「製造者寄付」に加えて棚田を守るという SDGs の観点から「販売者寄付」「大口購入者寄付」の仕組み提案を行い、寄付の仕組み構築が実現した。

「販売者寄付」は、棚田アイスの販売店が棚田アイスの売上に応じて寄付を棚田地域に還元するものでアイス 1 個 10 円程度（寄付額は販売者で決定）の寄付額となっている。「上勝アイス」の活動に賛同を得た寄付販売店舗は、現在、徳島空港ビル（株）、徳島県物産館（徳島とくとくターミナル内、注：高速バスのターミナル）、カフェケストナー（徳島市）、月ヶ谷温泉（上勝町）、RISE&WIN Brewing Co.（東京、上勝）の 4 組織・5 店舗となっている。ちなみに、徳島空港ビルは、SDGs の観点から棚田保全の寄付を行う国内で第 1 号の空港ビルとなる。

「大口購入者寄付」は、棚田アイスを 50 個以上購入する大口購入者には、仕入れ値で棚田アイス进行供給し、アイス 1 個につき寄付を行う仕組みである。企業、行政、教育、市民組織等を対象としているが、これら対象者へのアプローチはこれからであり、現在の実績は生まれていない。

このほか、今後の取組み課題であるが、「運搬者寄付」が実現できると棚田アイスの製造、販売、購入、運搬の寄付のサプライ・チェーンが構築されることとなる。

(3) 交流やつながりを生む地域の「SDGs 活動アイコン」としての棚田アイス

生物多様性の活動分野では、トキ、コウノトリ、オヤニラミ、シオマネキなどの生物アイコンが知られている。例えば、お米ではトキ米、コウノトリ米などが販売され、生物の保全と活用が同時に実現されている。同じように、SDGs 活動分野においても「SDGs 活動アイコン」が存在し、棚田アイスはそのアイコンの一つとして考えられる。

棚田地域は多くの多面的機能を持ち、これらの保全・維持・活用はまさに SDGs の活動そのものといえる。具体例では、棚田は東日本に多い畔を高くして雨をためる「天水田」と、西日本に多い山からの水用水で導く「用水田」に区分できる。用水田の棚田では、上の田んぼの水を下の田んぼに順次利用する「田越の水」で耕作する棚田も多く、上勝町の棚田でも多く確認できる。ここでは、少ない水資源を分かちあい利用している。

また、棚田アイスを紹介して、これまで棚田地域と交流の機会のなかった「製造者」「販売者」等との新たな交流、オンラインとなるウェブ棚田談義所での全国の関心層や支援者との交流、そして、地元棚田集落でのアイス試食による交流等といった、多くの交流やつながりが新たに誕生した。その具体交流の場の一つが、2020 年 10 月 3 日に「棚田アイス・ウェブリレー試食会」として実現した。徳島空港や高速バスターミナル、カフェ、月ヶ谷温泉等の販売店舗をオンライン等でつなぎ、秋田、山形、東京、神奈川、京都、徳島、上勝、福岡から、徳島大学、四国大学、山口大学など 6 大学の関係者も含め、参加約 40 名の参加を得た。このうち 10 名は棚田米を作る棚田地域住民の参加である。



写真 棚田アイス・ウェブリレー試食会
上：上勝会場、下：オンライン
2020 年 10 月 3 日開催

4. おわりに

今後、「切り身社会」といわれる現代社会において、つながりを呼び戻すであろう「SDGs 活動アイコン」としての棚田アイスを紹介した棚田維持・保全・活性化の取組みについて、継続して関与するとともに、注目していきたいと考えている。